
夜叉

鈴北岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜叉

【Nコード】

N9683Q

【作者名】

鈴北岳

【あらすじ】

サイレントマウンテン、夜叉の少年はそこにいた。

生まれながらに人ならざる力を持ち、人を知らない哀れな人型の化け物の少年。

そんな少年がある男とその弟子の少女と旅をするお話。

少年はそこで何を知るのか？

＊注意・・・これは作者の完全自慰作品で更新はかなり不定期の上、支離滅裂だったり、名称が適当だったりします。

夜叉（前書き）

注意・・・この作品は作者のやりたい、できるだけ派手でスプラッタなアクションが主体です。

不快な方は回れ右、お願いします。

夜叉

ここは魔法や魔物や人間が存在する世界、スーア。そこには大きな大陸が6つある。

その6つの大陸中でも最も大きな大陸、アシラーユの中央にある、商業国家コメイシャル、ここには少し前奇妙な噂がたった。

——サイレントマウンテン——

コメイシャルの近くには大小様々な山が連なるヤマヒ山脈がある。その山脈の中のさほど高くない小さな山がうわさの舞台だった。

その小山は周りを大きな山に囲まれ、昼間の僅かな時間しか陽が差さない。そのためか、そこに棲む動物達のほとんどが夜行性で、陽の光を必要としない。

噂ではそこが奇妙で不気味な静寂に包まれているという。

それは動物達が他の場所に移動したのではないか？

この話だけを聞いたものはそう思うだろう。しかし、この噂話は最近では次のように囁かれている。

——その小山には化け物が棲んでいる。

噂ではその化け物はここより遠くの場所で大きな怪我を負い、あまり動物が棲まないこの山に隠れ、傷を癒しているとか。

そのためにそこに棲んでいた動物は全て食われ、山にはどんな動物も近づかなくなったそうだ。

それを不審に思った、コメイシャルは傭兵を雇い、その調査に当たらせた――。

10名の人間がいた。彼らは年齢、身長、服装からまるで統一感が無く、一人一人が思い思いにそこで各自で調査をしていた。

その場所は背の高い木々に囲まれており、陽の光が入らないため薄暗く、そして、不気味なほどの静寂に包まれている。

「まったく、何で俺達がこんなこと・・・」

2人で行動していたうちの1人がそう呟いた。

「まったくだ。しかし金が無いからな、背に腹はかえられないだろ」

それに片方が答えた。

「その通りだがなあ、俺の本分は戦闘だぜ？ 何が悲しくてこんな魔物や動物がでねえ安全地帯を調査しないといけないんだ。こんなものアカデミックの学者連中に任せば良いじゃねえか？」

「仕方ないだろ、この山にはあんな噂が流れているんだ。アカデミックスの頭でっかちの腰拔野郎共ができるわけないだろ？」

この山にはある噂が流れている。それは化け物が棲んでいるという噂話だ。

「違うない」

二人は顔を見合わせ、そして笑った。

「なんだなんだ？　なんで笑ってんだ？」

それを不振に思った雇われた傭兵のうち、一人が魔法で創った明かりと共に現れた。

「こんな暗鬱な場所で長い間こんなくっだらねえ調査をやらされると思うと・・・」

「もう最悪を通り越して・・・、なあ？」

「笑わねえとやってられねえよ」

その傭兵は苦笑して同意する。そして、同じように自然と笑い声が出た。

「ハハハハハハ・・・」

ズッ——

「ん？」

「う、ウワアアアアアアああああああアアアあ！！！！」

突然何の前触れも無く、笑っていた傭兵の一人の首が血を噴き出して倒れた。

「ば、化け物がで・・・ギャアッ！」

首を飛ばした元凶と思しきものが目に入った傭兵はそれを仲間に知らせようと声を張り上げたが、最後まで言い切る前にその元凶に心臓を抉り取られ、絶命した。

「おいっ！？ クソッ！！」

残る一人の傭兵は後ろへと飛び退り、その元凶と距離をとった。

が――

「ア、グッ？」

元凶は傭兵が飛び退るスピードを、はるかに上回ったスピードで追いつき、その傭兵の右脚を掴んで、握りつぶし、悲鳴をあげるよりも早く、その傭兵の命を首と共に刈り取った。

「どうした！？ 何が・・・」

松明を持った傭兵が、火の光によって照らされたその元凶を見た。しかし、それを何か認識する前にその傭兵は胴体を真っ二つに引き

裂かれ、絶命した。

「ヒッ！」

それを偶然、ちょうどその引き裂かれた傭兵に追いついた女が目撃し、恐怖を認識した後、腹部が弾け飛び、天上へと召される。

「どうした?!」

「なんだ！ 何が起こってるんだ？」

「イヤアッ！ マヌエル！」

「大丈夫か!？」

悲鳴が聞こえ駆けつけてきた残り5人、彼らが見たものは無残に殺された自分の仲間。しかし彼らは、その仲間の死の感傷に浸ることを許されず、死を呼ぶ疾風が彼らを襲う。

「ぎひっ」

「ぐぺ」

一瞬にして2人の首は540度回転し、

「あっ」

女の傭兵の頭部が弾け、

「うぐっ」

大柄な傭兵は右肩から左のわき腹へと一直線に引き裂かれた。

元凶は残った1人へと、哀れで無力な自分の得物へと、眼を向ける。

が――。

「疾っ！」

鋭い呼気と共に、剣が元凶めがけ振り下ろされた。元凶はそれに驚きつつも、簡単に回避する。

「解放」

そう男が呟くと剣からバチッ、と青白い光が放たれる。

元凶はそれに危険を感じ、咄嗟にその場から飛び退いた。その元凶の予感は見事に的中し、男が剣を振り下ろした辺りが焦土と化していた。

「お前は・・・」

男は何を見たのかしばし呆然とし、気を抜いてしまった。

直後、男の体が弾ける。

元凶は僅かに顔を忌々しげに歪め、ペツとつばを吐き出して死体の後処理を始めた。

「号外だよ！ 号外！ サイレントマウンテンの噂は本当だった！
？ 未だ帰らぬ10人の調査隊、化け物に食われたか？！」

商業国家コメイシャルの首都の大通り、そこでたくさんのビラが
振りまかれた。

「なお！ コメイシャルは新たに、この山に住む化け物の情報に賞
金をかけ、その賞金は100万イェンだ！」

大通りに面した少し洒落た一店のカフェテラス、そこで座って軽
食をつまんでいる一組の少女と男がいた。

とがった耳、真っ白な肌、真紅の瞳のある切れ長の眼、同色の真
紅の豊かな髪を紐で一括りに束ね、ゆったりとした深い藍色のロー
ブを着ている少女。歳は13歳くらいだろう。

その少女の正面に座っているのは、少し日に焼けた肌、黒い瞳の
あるやや垂れ気味の眼、刈り上げた黒髪、黒い革のズボンをはき、
少女と同色で同じ丈のローブを着た、20代の男。

100万イェンという言葉に少女のどがった耳がピクリと反応した。

「お師匠」

「なんだい？」

少女の鋭い声と、男の柔らかな声。

「サイレントマウンテンに行きましょう」

少女は目の前の魚をナイフで切り分け、その切り分けたものをフオークで刺した。

「どうして？」

男は先ほどまで広げていた新聞をとじる。少女は魚の切り分けたものを食べた。

「ん・・・、旅費がそろそろつきそうだからです」

「ふうん？」

「この分の食費を引いたらあと、100イェンですよ？」

「そうか、じゃあ行こうか」

「はい」

男はそう言うのと立ち上がり少女もそれに続く。受付で代金を払い、

カフェテラスから出る。

「では、行きましょう」

男は大通りへ出るなりこう言った。

「人通り多いねえ・・・」

「気になさらず」

男の言うとうり、大通りはたくさんの人でにぎわっていた。

ここ、コメイシャルの首都は物がよく集まることで有名だ。そのため、ここは昼夜を問わず人通りが多い。もし、子供を連れていたら、すぐはぐれてしまうだろう。

少女は男の手を取った。これは決して、少女が男からはぐれることを不安に思い、男の手を握っているのではなく、男がはぐれないようにするためだ。

「嫌だ、人ごみは嫌だ」

「はいはい、行きましようね」

少女は男の棒読みの愚痴を流し、男を引っ張った。

少女は男の手を引っ張り、人ごみに流され逆らいながらずんずんと進んでいく。この光景は傍から見ると、子供が父親を振り回しているように見えるだろう。

男は少女が自分の愚痴を少しも聞いていないとわかると、僅かに口をとがらせた。

「流すなよ」

「・・・」

「おい弟子？」

「なんでしょかお師匠？」

「流すなよ」

「すいません、もう一度」

「・・・もいい」

男は子供のように眉間にしわを寄せた。少女はそれを見て、僅かに頬を緩める。そして歩くスピードを速めた。

「!? お、いつ!？」

男はつんのめるようにして地面に顔を打ち付けた。ガツンッ、と痛々しい音が響き、周りの通行人はそれを見て緩む口元を手で押さえ通り過ぎてゆく。

「お師匠、足元に気をつけてください」

少女は無表情でそう男に言った。

「~~~~・・・、小さいくせに先々行くな。手をつないでるとお前のせいでこける」

「それは私の成長が遅いことに文句をつけてるのか?!」

「あたぼうヴォっ!!?」

少女は人混みの中、器用に男のわき腹を挟るように蹴った。

「~~~~~! いくらお師匠といえど許さん!! 取り消せ!!」

実はこの少女、14歳である。しかしどういうわけか、発育が他の子より遅れていて、身長は135くらいのいまだに平坦だ。

「おい、弟——殺気が駄々漏れだ」

いつの間にか少女のけりから立ち直った男は、少女の体をグイと自分のほうへ抱き寄せた。少女は一瞬頬を朱に染めたが、男の真面目な表情を見ると一瞬で顔を引き締める。

ズガンッ、とそれは先程まで少女がいた場所へと落ちる。同時に大通りには砂煙が巻き上がった。

そしてそれは——

「チッ、弟子! 逃げ・・・!」

「遅い」

砂煙を纏い、男の顔に拳を入れた。男は辛うじてそれを手のひら

で受け止める。その衝撃で周りの土煙が吹き飛ばされた。

「弟子！」

男は咄嗟に少女の服の襟を掴む。

それは唱えた。

「グワド」

夜叉（後書き）

しょっぱなから戦闘。

ここでもう一度、この作品は作者のやりたい、できるだけ派手でスプラッタなアクションが主体です。

不快な方は回れ右、興味を持った方は作者に感想をください。

それだけで投稿ペースがマツハで上がります（多分、メイビー、may be）。

夜叉（前書き）

今回も戦闘パート

夜叉

ヴォン、と男と少女の見ていた景色が変化した。

否、変化したのではない。転移させられたのだ。男と少女の二人の眼の前にいる少年によって。

「お前」

少年は男を指差した。

「昨日、殺した。でも、なぜ、ここにいる？」

少年はたどたどしく、言葉を覚えたての子供のようにそう男に尋ねた。

しかし少年はなぜ、男を殺したといっているのだろうか。

少女は少年が何を言っているのかわからなかった。男は昨日ずっと少女と街を回っていた。そのため、男は殺されるはずは無い。

少女は男に訊こうとしたが、男の表情を見るとそれを止め、辺りを見渡した。

少年が二人を連れてきたのはところどころに発光植物の生えた洞窟だ。少年の背後には洞窟の出入り口、逆に二人の背後には湖が広がっている。

「人違いだろ。ってかここどこ？」

男は肩をすくめ、飄然と少年に尋ね返す。

少年はむっとした顔になり、次に少女に尋ねた。

「お前、なんで、ここいる？」

少女は逃げる算段を組み立てるのをいったん中断し、少年を見た。

少年の黒い髪と黒い瞳から、少女は極東の国の出身だろうと思った。身長は少女と同じくらいのどこにでもいるような少年だった。

「私は自分の連れに掴まれてあんたの転移に巻き込まれたのよ」

「そうか」

「で、出してくれるの？」

「だめだ。お前と、お前の連れ、見た、俺を。お前の、連れは、山に入った。だから、ここで、死ぬ」

「・・・どうしても？」

少女はそう少年に尋ねた。それに少年は少し思案する。その間に、少女は男に言った。

「どうするの？」

「敬語。——決まってるだろ？ 倒す。それと、あいつがああ噂の化け物だ」

「嘘でしょ？」

「残念ながら事・・・」

男の声はそこで途切れた。

「チッ！」

男は少女を引っ張る。

直後、そこで黒い旋風が巻き起こった。

男は少女を抱え上げ、少女は落ちないよう男の首に手を回す。男はそれを確認するよりも早く、出入り口へと向かった。

しかし、出入り口にはたどり着けない。なぜなら少年が男と出入り口の間にあの僅かな間に現れたからだ。

「・・・話の途中で攻撃するのは人間性を疑うよ。少年」

少年はこれ以上自分の情報を広げさせないために男を攻撃した。少なくとも少年はそう思っている。

少年は不思議そうに首を傾げた。

「にんげん、・・・せい？　なんだ、それ？」

男はそんな少年の反応に疲れきった表情になった。

「あのかな・・・」

「人間特有の本性、人間として生まれつきそなえている性質、人間らしさ、・・・よ。あんた学校行ってないの？」

「がっ、こう？」

少年はますます不思議そうな表情になる。

「・・・あんた、人間？」

「俺？ 俺の、名前、夜叉。人間、これは、俺の名前、じゃない」

少女も男と同じような表情になった。

夜叉って・・・、親が子供につける名前か？

少女、男共に呆れた。彼らはこの少年の戦闘能力の高さとは裏腹な、知識の無さにどうしても毒気を抜かれてしまう。

「まあ、そんなことは置いといて・・・」

若干空気になりかけ、気が抜けかけていた男が、気持ちを引き締めなおし話を促す。

「俺達を逃がしてくれるのか？」

「殺す」

夜叉の周囲の空気が変化する。同時に、夜叉が爆ぜた。

「オーマイゴッド」

「さっさと対処しなさい」

男の右側、少女の頭部に少年の蹴りが迫った。男はそれを難なく避け、少女は自分の命が危険にさらされたというのに顔色一つ変えない。

夜叉は姿勢を低くした。

「風縛^{ふうばく}」

男はただ一言、それを呟いた。それだけで夜叉の周りの空気が収縮し、姿勢を低くした夜叉に絡みつく。

「！」

「おゝれの、勝っち〜」

男は夜叉が動けない好きにその場から出入り口に向かった。

男の腕の中、少女は夜叉に掌を向け、唱えた。

「ライトアロウ、シャドーアロウ」

すると、少女の掌から白く発光する矢、黒い矢のようなものが撃ちだされた。それは夜叉へと一直線に向かい、当たり、爆発した。

「おいおい・・・」

「早く逃げましょう」

容赦ねえな、と男は呆れたように少女を見た。少女はそれを意に介さず、詠唱を唱え終えた。

「アイスウォール」

二人と夜叉の間に大きな氷の壁が地面から出現する。それは洞窟の天井に当たる直前に止まった。

「早く」

少女は男をせかす。

「へえへえ」

男は少女をおろそうとする。しかし、少女は断固として首に回した腕を放そうとしなかった。

「放せよ、弟子」

「こんな厄介ごとに巻き込んだ罰です。私が良いというまでそれで町に戻りなさい」

少女は平然とそう言った。

男は文句を言おうと口を開いたが、止めた。少女の額にはうっすらとだが汗が浮かんでいたからだ。

——無茶しやがつて。

男はそう心の中で毒づく。

準備運動も無しにいきなり激しい運動をすると、体力は激しく削られる。魔法を行使することは運動をすることと同じことだ。

魔法の源、魔力は大氣中から体に取り入れられる。取り込むのは難しいことではないが、それを行使することは多かれ少なかれ体力もしくは精神力が要る。

魔力を完全に支配下に置き、自分のイメージ通りに魔力を使う。それによって魔法が発動する。そして魔力は、もともと自分の中にある力ではない。

先程の少女の魔法を見ればわかるように、彼女の魔法にはあれだけの力、魔力がある。それを支配下に置くことは容易ではない。多大な精神力が必要なのだ。

それを精神を高め魔力を安全に支配下に置くための詠唱を破棄し、あまつさえそれを連続で使ったのだ。彼女の疲労は図り得ない。

「……わかった、しっかりと――」

男が少女を抱きかかえた後、背後で轟音が轟いた。

「ウウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——」

そして、その轟音すらかき消す咆哮が轟く。

「やべ・・・！ か」

男は魔法を唱えようとした。しかしそれはかなわない。

ヴォッ、と夜叉が男の眼前に回り込んだからだ。夜叉の右腕が矢のように、体を弓に見立てたかのように引き絞られる。

「死ね」

瞬間的な速度ならば、亜音速に近いほどの速度でそれは放たれた。

はくじゅん
「白楯！」

男は咄嗟にそう唱える。直後、真っ白で透明な壁が出現した。それは夜叉の拳と、それによる大気の乱流から男と少女を護った。

しかし、それだけである。

はくじゅん
「其は天神、おおくにぬし 大国主に命じて180縫を造られしもの！」

夜叉は台風のように乱流する大気の中、こともなげに動き、一瞬で男の右隣にまわった。

はくじゅん
「白楯！」

もう一つの白い壁が男と夜叉の前に出現する。

今度の魔法は詠唱有り、故に先程よりも魔力量と質ははるかに高く、あの一撃で破壊されなかった魔法だ。たとえ夜叉のあれが全力

でないにしろ、破壊されまい。

「弟子、魔法を準備しとけ。本格的に戦闘だ」

「わかっています」

少女は男の腕の中、精神を極限まで高め、いつでも自分の中で最高の出来の魔法を放てるように構える。

「ヤチャ、イギヨン」

夜叉は体を縦に回転させ、斧のように足を振り下ろし、白い壁にたたきつけた。するとギシツ、と壁が歪むような音を立てる。

その音に男は恐怖し、顔を引きつらせた。

「ヤチャ、イニヨタン」

夜叉の体が回転のスピードを上げた。

そして響く、破滅の運命が扉を叩く音。リズムカルに、絶え間無く。それは、死の運命の近いものを狩りにきた死神のかける足音に違いなかった。

———どうする———？

どうすれば良い？ 男は限られた時間の中、必死にそれだけを考えた。

白楯は男の使える魔法の中でもっとも耐久力のある魔法だ。この

魔法以外の耐久力のある魔法は知ってはいる。だがしかし、それだけでは使えない。

詠唱をし、魔法名を唱えるだけでは魔法は使えない。いくら太極拳の型を知っていようと練習しなければ体が思うように動かないように、魔法を構築するには知っているだけでは使えない。

ぶっつけ本番、火事場の馬鹿力を信じるか？ 駄目だ。彼一人ならば良いが、彼は少女の命を預かっている。可能な限り、安全な策を使わなければならない。

攻撃魔法、これしかないだろう。

男は不本意ながら魔力を練り始め、詠唱を始める。

「其は神、天稚彦が用いた天の鹿児弓！ 其につがえるは大蛇の如き大きな矢！」

ビシリ、と壁に亀裂が走った。

あまのはばや
「天羽々矢！」

ガシャン、と壁が碎けるのと、男の攻撃魔法が発動するのはほぼ同時だった。

男の前から放たれたのは突風。それは極太のレーザーのように夜叉に放たれる。

「！」

夜叉はそれをくらってはいけないものと判断し、横に跳んで避けようとする。しかしそれはかなわず、夜叉が動くよりも早く、男の魔法は直撃した。

「――！！！！！！」

夜叉は突風に押され、洞窟の壁に叩きつけられる。そして夜叉は重力に従い、地面に落ちる――。

――はずだった。

「収縮したりて光の力、矢をかたどりて敵を穿て。ライトアロウ」

少女が詠唱を追え、発光する矢を夜叉へと放った。

無論、先程の男の魔法が直撃し、動ける状態でない夜叉にそれは直撃した。そしてもう一度壁に叩きつけられ、地面に崩れ落ちる夜叉。

彼は体の落ちる浮遊感の中、意識を失った。

夜叉（後書き）

誤字脱字、感想待っています。

夜叉

男は肺にたまった空気を搾り出すように吐き出した。

——危なかった。

あと数秒決断が遅ければ、男と夜叉の立場は逆だった。そして、少女にいたっては即死だろう。

「しかし、弟子よ」

「何でしょうか？」

「お前は容赦ねえな」

「お褒めに預かり光栄です」

「褒めてないし。お前光栄だともなんとも思っていないだろ」

「さて、あの少年を縛って起こしましょう」

「・・・流すなよ」

少女は男の言葉を意図的に締め出し、夜叉へと歩み寄った。

少女は夜叉に手をかざし、詠唱を始める。

「其は、ドワーフにより存在せぬものから創られし、彼の大狼フェンリルを縛りしもの」

少女の手が白く発光した。

「グレイプニル」

白い光は夜叉に絡みつき、力強く発光した後、白い鎖となつてが
んじがらめに縛り上げた。

「これで良いでしょう。これで無理ならば手の施しようがありませんね」

このグレイプニルという魔法は、唯一少女が男より完全に上回る魔法だ。これを夜叉が破るとなれば、男は本気で夜叉を殺さなければならぬ。

「そうかい。んじゃ、肉体労働担当行きますか。——オン、

男がそう唱え終えると、男を中心に埃が上がった。少女はその埃に、口元に手をあて顔をしかめる。

「お師匠、それはどうにもなりませんか？」

「うーん、色々な技術に手を出してみただけだね、無かったよ。これをする時のこの風は」

はあ、と少女がため息をついた。

「それ、夜叉とかいう少年にかけますか？」

「今は駄目だよ。多分だけど、面倒なことが起きるから。夜叉には同意を得ないと」

少女の眉が僅かにつり上がる。

「・・・もしかして、連れて行く気ですか？」

少女は恐る恐るといった様子で男にそう尋ねた。

男は当たり前、といった様子で少女に言った。

「そうだけど？」

少女はそれを聞くと声を荒げた。

「何ですか！　今はただでさえ食費すらままならないんですよ？　そんな中でその少年を連れるということは更に苦しくなるんですよ?!」

少女は得体の知れない化け物を連れて行く、ということよりも生活のことを心配しているようだ。

「いやいや、彼にはしっかりと働いてもらうさ。――僕の代わりにね」

「何ですか！　意味無いじゃないですか！　それ以前に更に悪化しますよ!」

男は少女の大声に、耳をふさぎ顔をしかめた。ここは洞窟内である。そのため、少女の大きな声はそこで反響し、男の聴覚にダメ

ージを与える。

「冗談だよ。ちゃんと僕も働くさ」

男は耳を手でふさぎながら少女にどこ吹く風といった様子で答えた。少女はまだなにか言い足り無そうだったが、状況を考え、ここでの言及は諦めた。

男は少女に背を向け、夜叉に手をかざして唱え始めた。

「何をする気ですか？」

少女は男の行動を疑問に思い尋ねる。

「んゝ、簡易の能力封印。——オン、」

男が唱え終わると、手が光った後、夜叉の体が光った。

「これで安全だろ」

男は夜叉を担ぎ上げ、後ろの少女に笑いかけた。

「さて・・・」

男はここで少女が疲労していたと思い出す。

「寝るか」

「何ですか!？」

またしても響く、少女の怒号。男はゆっくりと降ろそうとしていた夜叉を、その声に驚いて落としてしまった。

少女はそれに続けなにか言っていたが、恐る恐る夜叉を確認する男の耳には入らなかった。

幸い、夜叉は起きなかった。男はそれに安堵し、少女に向き直る。

「――て、釈迦に説法かもしれませんが、良いですか。お師匠が言うように魔法は全能ではありません。そのため、いつ、どんなことで私達のかけた魔法が解けるのかわからないのですよ。今、ここでこれの相手をすることは・・・」

男は少女の眼の前に手を突き出した。

「・・・何ですか」

「すいえん睡煙」

男は少女に突き出した手でフィンガースナップをすると同時に、ただ一言そう唱える。すると男の指先から煙が立ち上り、少女の顔を覆った。

少女はその煙を吸わないように息を止めたが、すでに遅く、少女はその煙を吸い込んでしまっていた。

「お・・・師匠・・・?」

少女は悔しげな表情で男を睨みつけた。しかし、男はそんな少女に対し、父親のようにこう言った。

「お休み」

それが少女に届いたか届いていないか、少女はその場で崩れ落ちる。少女が地面に体を打ちつける前に男が支え、優しく地面に寝かした。

「オン、
■■■■■■■■■■
■■■■■■■■■■
■■■■■■■■■■」

男がそう唱えると、先程とは変わって男を目指して風が吹く。

男は風が収まると、ため息をついて、地面に腰を下ろした。そして、少女が起きるまで静かに眼を閉じる。

夢を見ていた。

世界の時間にとってはだいぶ前、
 だけど俺にとっては昨日のこと。

それを夢で見た。久しぶりじゃない、それを見ない眠りなど無いものだった。何度見てきただろう、何度それを他人事だと思ったんだろう。

何度それで、狂いたくなっただろう。

岩や水、何度それになりたかつたものか。何も考える必要の無いものに。

今日、あの子の男を見つけた。男は気づかれないと思ってたのか、俺に対して白を切った。

確かに、昨日の男と今日の男は姿が違う。においも、声も違う。だけど俺にはわかる。あいつは昨日の男だった。

こういうのを母は……ガンタと言っていた。母が言うに、俺と母しか使えないらしい。

とりあえず、相手がどんなに自分の外見や性格を変えたとしても、俺にはそれが誰かわかるということだ。

母！

俺はやるべきことを思い出した。

俺は男にやられたんだ。その後のことはわからない。あいつらの狙いは――

一氣に頭が覚醒した。男と少女は寝ている。――殺す！

だけど体が動かない。白い何かで縛られていた。

———「そうか、なら徹底的に抗ってやる。」

「ウ・・・・ウウオオオオオオオオオオオオオオオオ———」

————— ! ! ! ! !

できるかはわからない。だけど、あいつらに母の誇りを踏みにじられるようなら、俺のこの声でここが崩れるなんていう希望にでもすがってやる！

咆哮。それで少女と男は目を覚ました。

「チッ！ あいつか！ ——弟子！」

「やってます！ シルフよ来たりて彼の者と我らを断ちたまえ！
『エアセパレイト』」

周りの大気が渦巻き、夜叉を囲むように真空の層が覆った。これで夜叉の声による洞窟の崩壊がおさめられたと思いきや、依然として、洞窟は鳴動する。

「なっ！？ なんでよ！ 音は真空では通らないはずじゃ・・・！」

そんな状況に珍しく狼狽する少女。そんな情けないたった一人の弟子を見て男はいらだたしげに舌を鳴らした。

届くことは無かった。

夜叉は怨嗟の叫びを上げながら、殺意をこれでもかというほどこめ、男を射殺するように睨みつける。

「――――」

男は朗々と何かを詠み始める。頭が割れそうな叫びを平然と聞き流し、なお夜叉のために何かを詠み続ける。

意味はわからない。しかし夜叉は男に僅かな変化が起きていることに気がついた。

男の眼の焦点が合わなくなってきたいるのだ。男の瞳の放つ光がだんだんとうつろなものへと変化してゆく。

夜叉は叫ぶのを止めた。洞窟の振動がぴたりと止む。真空の壁が崩れる。男の眼が死者のようなものへと変わる。

不気味だった。

男と少年と少女の三人がいる薄暗い洞窟。少女と少年は動けず、男はただ何かを朗々と詠むだけ。

「■■■■！」

男は最後に声を張り上げ、詠みおえたことを示す。すると、夜叉に何かがかかった。

夜叉は男が詠んでいたのは呪文だと思った。だとすればその魔法

をかけられたのは自身であるとも思い、体に異常が無いかを探った。しかし特に異常は見つからず、夜叉は困惑する。

男の瞳に生氣が戻る。

「よし降りるぞ、準備しろよ弟子」

「・・・はい」

少女は呆然としていたが男に声をかけられ、洞窟の出口に歩き始めた。男もそれに続いて歩き出す。そして夜叉は自分がこれからどこに連れて行かれるかを悟ったとき、縛られた体で器用に暴れた。

「！おい、落としそうだから暴れるな」

「うるさい！ お前、ここ、話さない、来ない、なら、殺さない！俺、ここ、いなければ・・・！」

男は夜叉の身を案じ夜叉をたしなめるが、夜叉は更に激しく暴れ、ここに置いてけ、と言う。

「ふむ・・・」

男は考え込むこと数秒。

「えいっ」

結論、夜叉の首筋に手刀を強く落とした。夜叉はそれで気絶した。

「さーて、100万イェンっ♪」

男は何事も無かったように歩き出す。

「・・・」

少女も同じく黙って歩き出した。

暗躍

一人の男がいた。

年の頃は二十代前半か。

銀色の自身の身長よりも長い髪と、形の良い細い眉、紅の瞳のはめ込まれた切れ長の双眸、スツと整った高めの鼻、薄紅の整った細い唇。それらは世界最高の人形師が生涯をかけて作ったかのような、神々しさすら感じさせるほどに整った顔にあり、どこまでも正確無比に黄金比で配置されている。

女性と見間違えるほど華奢で細い長身の、裸にならねば男性と断定できないまでのどこか扇情的で蠱惑的な肢体。そこから伸びる新雪のように白く、長く、たおやかな手足。

彼の肌と同じくらいに白い長着ながぎを黒い革のベルトで締め付け、その長着の大きく胸のはだけた部分から覗く黒いタンクトップ。これが彼の服装だった。

男は地平線まで風景の変わらぬ、雲ひとつ無い空から注ぐ月明かりの照らす砂漠を歩いている。

男は荷物を何一つと、水筒の一つすら持っていない。身につけた服と体一つ、砂漠にいるにはあまりにも異常すぎで、あまりにも命知らずだった。

そして、その男の周りに突如出現する黒い、多数の影。その影は男の周りを取り囲み、そのままじりじりと男ににじり寄る。

男はその集団を視認すると、整った顔に傾国の美女もかくやという微笑を浮かべ、スウツ、と右手を天に向ける。

黒ずくめの集団からは男へと濃密な殺気が注がれている。それも砂漠の砂の下にいる生き物達が全力で逃げ出すほどの強烈なものだ。

しかし男はそれを受けながら平然と、まるでその殺気をものとせずたたずんでいる。その上、その顔には聖母のように慈悲深い微笑み。それはどこまでも、どこまでも慈悲深い。

黒い集団は男への距離をある程度詰めると、閃光のように男へと疾駆した。なぜか？ 殺すためだ。黒い集団の者たちは各々が自らの得意な得物を手に持っている。

途端、男から聖母のような微笑が消え去り、その場に圧倒的な黒い歓喜が満ちた。

男は宙に上げた右手で何かを持つ仕草をし、その右手を振るった。風が途切れる音、それが鳴ると、黒い影から赤黒い血が噴水のように上がる。

黒い影も男もその異様過ぎる光景に驚かない。この様子だとうやらこれは彼らにとっては日常茶飯事のようなのだ。

最初の男の攻撃を喰らわなかった黒い影は、背後から男ののど元へとダガーを走らせる。が、男は後ろにも眼があるかのようにそれに反応し難く避け、あまつさえ、空いている左手で黒い影の頭と

思しきものを掴み、握りつぶす。

熟れた果実のように飛び散る鮮血。それが男の体に一滴とてつくことは無かった。なぜならもうそこには男はいないからだ。

細い体からは想像のつかない跳躍で男はその場から跳び上がった。同時に黒い影達に向かい右手を何度も振るう。

二度目の鮮血の噴水、それは先程よりも多い量。だがしかし、その血が男につくことはまたしても無かった。

鮮血の噴水の中、突如、男の動きが止まる。男はその原因をすぐさま辿った。その視線の先にあるのは男の右手の直線上で両手で何かを持つポーズを取っている黒い影。

「――」

黒い影の男達が何かを叫ぶ。すると、男へと向かい、黒色の矢が放たれた。

その数は暴力的な数だった。その数は一万を越すだろう。もはや矢の弾幕などではなく、ただの壁、それらは男を完全に取り囲む。

圧倒的、絶対的に絶体絶命の危機に立たされる男。しかしなお、男は微笑む。それがこの暴力的で圧倒的な絶体絶命の危機に対する、絶対的に正解していると信じている表情のように。

男は右手を開く。そしてただ一言、紡いだ。

其は鍛冶師の義胆を祓うもの
「アイギス」

瞬間、黒い矢が男に突き当たり、周りが砂煙に包まれる。それを気を抜かず睨みつける影達。砂煙がある程度晴れ、影達が動いた。

砂煙の先には何も無かったのだ。男の死体も衣服も、血も。それで影達は瞬時に悟った。逃げられた、と。

黒い影達はその場から遠くに跳ぼうと、あるいは地面にもぐろうと、膝を曲げ砂漠に両手をつき、力をこめる。

まさに一斉にその場から離れようとした瞬間――――

虐殺が始まった。

悲鳴は無い。なぜなら黒い影達のはどを潰されているからだ。

男は影達を次々と惨く屠った。ある者は脳天から股間までを真っ二つに切り裂かれ、ある者は首を飛ばされ、ある者は四肢を断ち切られた後に頭部を破壊され、またある者は全身を握りつぶされた。

月明かりのもとで行われる広大な砂漠での音無き殺戮。サイレント・キル 黒い影から流れ落ちる鮮血を砂漠は貪欲に吸い込んだ。

「くは、くはははは——」

——ようやく、見つけた。

男は体をそらして右眼を覆い、天に向かって高らかに哄笑をあげる。

その様は神の手によって作られた姿にはとてつもなく似合わなかった。どこまでも幻想的で神秘的なその姿とは。

銀をそのまま糸にしたようなほつれ一つと無い銀色の髪、最高級のルビーのような真紅の瞳、陶磁器のように白くしみ一つと無い肌。どれをとっても世界中の女性全員が羨むものだ。

どこまでも中性的で洗練し完成された、完璧完全無欠の神の使い、否、神とも見紛うその姿。しかしそこに潜むは悪魔。羊の皮を被った狼ならぬ、神の皮を被った悪魔だった。

男の周りには生物だったものが辺りに散乱していた。真っ赤な血は既に砂漠の砂に吸われ、辺りを赤銅色に染め上げている。

一陣の風が吹き、赤銅色の砂を巻き上げる。

善悪などの意思の無い清々しい月明かりは、悪意からでも善意からでもない汚れなき純粹な殺意によって染め上げられたその赤銅色の砂を照らし出す。その光景はどこか神秘的だった。

しかし男はその光景に少しも目をくれず、一瞥することもなく、走り出した。

ようやく見つけた——

「待っている、もう少しで貴様は俺に会える」

——探し物をその手におさめるために。

男は純白の風と変わり、砂漠を駆ける。

男はあの大量虐殺の中、ただの一滴すら返り血を浴びることは無かった。神の皮を被った悪魔は、どこまでも汚れなき存在だった。

アンティーク調にこしらえられた部屋とそこに鎮座する家具。その室内に唯一ある大きな窓から差し込む月明かりは、少女と少女のいる部屋を照らし出した。

「見つけましたわ」

少女はサファイアのごとき瞳のある眼を開いた。

背の中ほどまであるウェーブのかかった金紗の如き金色の髪、海のように鮮やかな青い瞳のある可愛らしい眼。幼くも美しい顔のつぐりの十三歳くらいの少女。

白を基調としところどころ青の刺繍の入っているゆったりとした法衣を身につけ、その法衣についているフードを深く被っていた。

「ツアレ」

少女は誰一人いないはずの部屋で呼びかける。すると、意外にも声が返ってきた。

「何でしょう？」

「ニルね。誰か手の空いているものは？」

「フィーアが空いております」

少女はそれを聞くと苦い顔になった。

その表情からしてフィアという者は何か問題のある人物なのだろう。少女の苦い顔にはそれがありありと浮かんでいた。

「ニル、フィアには到底任せられそうに無いわ。だから貴方をお願いするわ」

「・・・私にはお嬢様の護衛という任に当てられているのですが・・・」

「ニル、いくらあのフィアでも私の護衛はできると思うわ。でもこれは任せられそうに無い」

「・・・わかりました」

ニルと呼ばれるものはしばらく逡巡した後、少女からの任務の内容を聞き始めた。

「以上よ。彼は絶対に五体満足の状態でここに連れてきなさい」

「了解しました。我が――」

「貴女も五体満足で帰ってくるように」

「――・・・最善を尽くします」

少女の部屋に響く誰かが立ち去る音。

少女は窓から空に浮かぶ月を見上げる。

強襲

「これがあの噂の正体です」

「・・・なんと・・・」

男と少女はコメィシャルのとある一室にいる。もちろん、それは噂の元凶を捉えたのでその報奨金をもらうためだ。そのため男と少女の周りにはコメィシャル屈指の実力者達がいる。

彼らは職業柄それなりに肝が据わっている。多少のことでは動揺などするわけがないのだが、目の前の白い鎖で縛られている少年を見て絶句している。

手入れのされていないばさばさの黒い髪を持ち主。その少年は13歳ぐらいだろう。体つきは華奢でとても線が細く、そんな少年が仮にもあの傭兵達を殺したとはにわかに信じがたい。

その少年は鎖に縛られ身動きがとれずただ地面に転がされている。そんな圧倒的に不利な状況でも少年は周りの者たちを眼光で殺さんばかりに睨みつけている。

「金欲しさに嘘をついたのだろうか？」

ちょっと前、彼らのうちの一人がこのようなことを言った。

だがその言はあらかじめ男によって予想されており、魔法具であらかじめ撮っておいた映像を見せることによって揺るぎない真実となった。

「うむ、よくやってくれた。——ほれ、報酬だ」

「ありがとうございます」

男は恭しくそれを受け取った。

「ふむ……ところで君達の名前は何と言うのかな？」

「ん、私の名前はフォルテです。で、これが私の弟子のカレンです」
フォルテと名乗る男が少女の名前を紹介すると、カレンはぺこりと頭を下げた。

「！」

「そうか。フォルテ、ものは相談なのだが——」

この町の軍隊の魔法の指導を頼まれてくれないだろうか——、その声は遠くから轟く、雷鳴のような轟音とそれに少し遅れてやってきた振動にかき消された。

「ふ^母あふあ！」

縄で縛られ、声も魔法も使えない少年の体が雷にでも撃たれたかのように、体で使えることのできる筋肉を使って跳ね上がる。そしてそのまま、膝を折り曲げて、器用に飛び出した。

「なっ!？」

「とことん出鱈目ね！ あれは！」

「まったくだ！　いくぞ馬鹿弟子！」

「誰が馬鹿弟子ですか！？　ガキみたいな師匠にそういうのは言われたくありません！」

「誰がガキだ！　スカポンタン！」

「古いです！」

二人は互いに互いを罵りあいながら少年の後を追っていった。

「つて、あいつはホンツツト、とことんを通り越してバケモンだなッ！　あんなまま普通に走る俺達より速いってこれいかにっ！？　だねえっホンツト！　カレンさん、どう思いますウツ！？」

「それになんとか付いてく大馬鹿師匠も大概ですねッ！」

カレンはフォルテの背に飛び乗っていた。あまりにも先行する夜叉のスピードが速いのでフォルテがカレンを背負ったのである。

「んなことア——知ってるツツーの！　俺はこれがデフォなんだよアホ弟子！」

「貴方のデフォはガキです！」

「んだところあっ！？」

「・・・はんっ」

「鼻で笑われたッ！」

・・・などとそのような状況でこのような漫才をしているあたり、カレンも大概大物である。

「んで、弟子よ。真面目な話、どうする？」

「どうもこうもできませんよ、お師匠。ただこうやってついて行くことだけしかできませんから」

「まあ、そうか。ではここらで推理でもするか」

「お、久しぶりですね。そういうの。私がお師匠に師事したばかりの初めの頃は良くしてましたね」

師匠の提案に懐かしそうな表情のカレン。

「考える癖をつけさせるための教育だ。ためになったろう？」

「ええ。ためになるついでに、お師匠がそう言った時は何も考えていないことがわかって失望しましたが」

「・・・ま、その話は置いて、だ」

容赦のない弟子の、無遠慮で辛辣な言葉が師匠に突きたてられた。

「手がかりは彼の『ふぁふぁ』という言葉ですね」

「誰かを『パパ』と勘違いしたんじゃないか？」

「もしくはお師匠に『馬鹿』と言ったのかもしれませんがね」

敬愛すべき師匠の軽口に軽口で答える弟子。そこには余裕すら滲んでられる。

「・・・今日はやけに辛辣だな」

「苛立ってますからね」

そう言ってニツコリと笑うカレン。そう言って笑う顔のこめかみにはひくひくと青筋が浮かんでいた。

そう、このカレン、さっきからずっと苛立っていたのである。今日一日でこれまでにないほどの、突然な迷惑に見舞われ、それもその原因がこのガキのような馬鹿師匠の余計なちよっかい。

カレンは気の短いほうではないが、長いほうでもない。いたって平均なのだ――普段は。

夜叉との戦闘でカレンは疲弊していた。その疲れは洞窟内で寝たときにある程度回復したものの、いかなせん苛立ちは回復しない。

そしてその苛立ちは現在進行形で雪だるま式に増加している。

「馬鹿お師匠のいらんちよっかいでこんな厄介ごとに巻き込まれて、その上やっとうまくいけると思いきやこの騒ぎ。馬鹿お師匠のよくなアホみたいな体力や魔力、化け物じみた戦闘技能は私は持ち合わせておりませんので」

「そんなに褒めるなよ」

フォルテは照れたように言った。

「ちよっ！？ 止めっ・・・！？」

ギリギリギリ——！！

「だ・れ・が・貴方を褒めているんですか？」

「くっ首がっ！」

カレンはフォルテの首を後ろから締め上げた。といっても気管だけを圧迫しているので、一応落ちる心配はない。

「話の流れからして私はなぜ、貴方を褒めるといふ行為に及ぶのでしょうか？」

・・・心配はない、心配はないのだが・・・代わりに夜叉を追うスピードが落ちている。それで良いのだろうか？

「ちよっ、スマ・・・、ペースが落ちる！ お願い冗談だから！」

陽の光の当たらない暗鬱とした空間。そこに太陽かと思ふほどの光を放つ存在がたたずんでいる。

黒い革のベルトで締められた純白の長着、そこから伸びるたおやかな処女雪のごとく白い肌の腕と脚。最高級の純銀で編んだ銀糸の髪、曇り一つない澄んだ紅玉の瞳、天上の美女とも、女神とも呼べるその容貌。

うっそうと木々がただ密集する美しさの欠片のない空間に、彼が存在するだけで背徳感を漂わせた、どこか扇情的な一枚の絵画がここに完成していた。

その彼が見つめるその先にあるのは、無秩序にコケの生えた大岩。コケが生えこの場所が暗いこともあって、見えにくいがこの大岩には大きな注連縄がかけられていた。

風情のふの字もない大岩。その大岩を彼は恋する乙女のように、熱に浮かされた視線を注いでいる。

「――ようやく――」

ポツリと、上擦った声。

「――――――――――ようやく貴様を手に入れることができる」

ここに人がいれば間違いなく理性をなくし彼に襲い掛かるだろう。それほどまでに今の彼が放つ雰囲気は扇情的だった。もっとも彼に返り討ちにあうのがオチだが。

彼はそっと、愛でるように大岩に触れる。

――バチチチチツツツ！！

しかしどういいうわけか、大岩は彼を拒み、電撃で彼の手を焼いた。

「貴様は、俺を拒むのか」

憤怒、天使のような顔は純粹な憤怒に歪む。立ち上る肉の焼ける臭い。彼の手には激痛がはしっていることだろう。が、彼はそんなことを意に介さず、大岩に手を押し付けた。

右手で大岩を砕かんばかりに握りしめ、左手で拳をつくり、たたきつけた。

「オ――――！！」

雷撃の弾ける音と、大岩を殴りつける轟音。

「オオ———！」

殴る。

「オオ———！」

殴る。

「オオオ———！」

ただ力任せに殴りつける———。

「オオオ———！！！」

既に彼の手は焼け爛れ、肉の焦げた不快なおいが漂い始める。

「オオオッ———！」

肉の裂ける音、血が飛び散る音、指の骨が碎ける音。それらはどこまでも不快な音で、それらはどこまでも不快なおいで———。

だからこそ彼は更に燃え上がる。

「クハッ・・・」

彼はいったん攻撃の手を止めた。

「クハッ・・・クハハハハハハハハハハッ！」

——流石だ。流石貴様だ。

男は高らかに哄笑している。

——俺に傷を与えることのできるモノが創れるとは。

先程までの憤怒の表情は消えうせ、代わりに歓喜の表情が表れた。

「ああ、ああ、貴様はそうでなければならぬ。貴様は常に俺より先、もしくは俺と同等でなければ——」

——うっかり、■してしまいそうだ。

ひとしきり男は笑い終わると、構える。右足をさげ、前方に全体重を預けた。そしてゆっくりと右手を後ろに引いて上に上げ、左手を前に伸ばして下に下げる。

そして、一言紡いだ。

其は敵を驕ゆしもの
「ルーン」

右手が光り、それは一瞬で渦々しき流星へと変化する。

男の右手は寸分変わらず大岩の中心へと迸った。刹那、これまでの比ではない電撃も迸る。それらは均衡し、だがその均衡は一瞬で崩れ去り、男の右手は大岩に突き刺さる。

そして、大岩は砕けた。

強襲

ダンッ！

夜叉は縛られているにもかかわらず、器用に空間を駆ける。

「ふほっ！
クソッ」

苛立たしく体に力をこめ縛っている白い鎖を引きちぎろうとするが、白い鎖は千切れるどころか伸びもしない。

その様子を見て、夜叉はひとまず鎖のことは捨て置き、口にはめられた猿轡を噛み砕いた。

「ペッ！」

猿轡の破片を吐き捨て、次に白い鎖に噛み付く。が、それでも噛み砕くことはできない。その事実に関顔をゆがめ、渋面になる。

すぐに白い鎖を壊すことを諦め、脚に力を集中させ、砲弾さながらのスピードを出した。

「カソ！」

夜叉は魔力を体に充填し、魔法の引き金となる言葉を紡ぐ。その次の瞬間、夜叉は加速——するはずだったが、魔法が発動せず、スピードは少しも変わらなかった。

夜叉はそれに戸惑う、が、次の瞬間にその思考を早々とあの男の

封印のせいだと決定した。理由としてはあの男の魔力がこの体に染み付いているからである。

「ウ~~~~~！」

若干涙目になりながらも、愚直にそのまま自身の住処へと駆ける。

と、ここで、急に夜叉を縛る鎖から、何本もの鎖が飛び出し、それは周りの木々に巻きつき、夜叉の動きを阻害する。

「お師匠！」

「やっと追いついた。……ってこいつ特注の猿轡噛み砕いてやがるっ!!」

高かったのに……、と地面に両手両膝をつきうなだれるフォルテ。

そんな師匠をほうっておいて、カレンは夜叉に話しかけた。

「簡潔に言います。貴方は何をしに？」

「……母、助ける、ため」

「母を助けるためですか……」

「ふあふあって母のことだったのか」

「あれ？ もう復活したんですか？」

「時は金なり。——ってなんで舌打ちするんだよ!？」

「そのまま絶望に溺れて死ねばよかったのに。・・・あ、すいません。つい本音が」

「本音!？ 手塩にかけて育ててきた弟子にそんな本音が!？ 酷すぎる!？ もう止める! 俺のライフはもうゼロだ!」

「気持ち悪い」

ススッ、とフォルテから離れるカレン。フォルテはさも絶望したかのような演技をすぐさま止め、真面目な表情になる。

「場所のはあの山だな。弟子、グレイプニルを解け」

「いいんですか？ 彼が暴れだしたらまた止めるのに一苦労ですよ」

「別に良さ」

夜叉へと視線を向けるフォルテ。

「————その時は容赦無く叩き潰すから」

殺気————

ゾクリ————と夜叉の背中に悪寒が走る。それは原初に刻まれた生存本能からきたもの。根源的な逆らう気力すら起きない恐怖。

彼はこれまで山奥の生存競争の激しい場所で生活していた。故に、彼我の、絶対的な実力差というものには敏感だ。

夜叉はカレンを見る。カレンに怯えた様子は皆無だ。夜叉はそれに戦慄する。

考えられるのは二つの可能性。一つはカレンがこの殺気に耐えられるほどの強者であること、もう一つはこれほどまでに濃密な殺気を一点に絞ることのできるフォルテの実力。

彼はどちらがあっているかを考えようとして——止めた。どちらにせよこちらが圧倒的に不利なものには変わらない。

「・・・協力、して。襲撃、者・・・強い。存在・・・自体、他、越えてる。・・・圧倒的。俺、勝てない」

フォルテはその言葉を聞くとキョトンとした顔になり、次に、明るく笑った。

「うし。それじゃ、行くか弟子。敵はおそらく最大級の三世紀級、スリーセンチュリーズクラス下手すりゃ塵一つ残らないし、上手いかなきゃ死亡だ。心してかかるぞ」

「言われなくとも。少し精神を集中させてあの山の方角を探れば、簡単、ではありませんがそれほどの力があることは解ります。・・・たしかに、滅多にお目にかかれない大物ですね」

人間よりもはるかに強大な力を持つ種族、それは一般に超越種と呼ばれている。超越種は、人間に比べ、圧倒的に数が少ないが、はるかに長命だ。そして長命故に、全盛期が長い。

長命であるということは、それ故に豊富な経験を積んでいること

になり、全盛期が長いということは、それだけ長い期間強くあれ
ということだ。

無論、人間がそれに勝とうと思えば、勝つことはできる。そう
でなければこのように人間は生きてはいない。

そして、その超越種を人間は強さを表す一つのはかりとして、あ
る条件を満たす個体を級別クラスに分けることがある。

それは、？存在感？である。

ここで先程フォルテが述べた三世紀級スリーセンチュリーズクラス、それは最低でも三百年は
生きているであろう超越種だ。

？存在感？とは読んで字の如くそのままの意味である。気配や雰
囲気、というものでもあろうか。

生物はそこにいるだけで何かしらのものを発するものである。熱
や振動はもちろん、微弱ながらも電気だって発している。

詳しいことはまだ解らないが、それらの『そこに在る』ことで発
するものを総合したものを？存在感？と呼ぶ。

多くの人が行き交う場所で、ふと、周りの人とは違う、と感じる
人を見たことがないだろうか？ もしくは初対面の人を見て、その
人が自分と何かが決定的に違うと感じたことがないだろうか？

そういう人は大抵、何かしらのものが自分より優れていたりする
のだ。

生物は年をとることで経験を得る。経験を得ることは自信を持つことにつながり、その自信はおのずと外に漏れ出して、それに見合うだけの風格を得るのだ。

その風格は周りと違えば違うだけ、解りやすい。生物としての生存本能がそれを知らせるのだ。こいつには気をつけろ、と。

もちろん、それが常に正しいとはいえないが、一つの目安となる。

ついでだが三世紀級は、程度にもよるが大概の小さな国一つは一体で優に滅ぼすほどの実力を持っている。

「なあ、夜叉。お前の転移で山までいけないのか？」

「・・・目印・・・壊れた。・・・魔力、足り・・・ない」

「・・・役立たずですね」

「大丈夫だ。俺が相手をすれば良い。そうすりゃ、殺される心配はないからな」

「お師匠が殺されない限りですが」

静謐なる澄んだ空気の空間。その静謐に包まれるように置かれた聖櫃。

それは岩で作られた無骨なもの。しかしその無骨な岩の聖櫃からは、それを作った者の思いが込められている。

「・・・やはり、老いには勝てぬか。かの鉄扇公主といえども、所詮は——俗物の身」

その岩の聖櫃を美姫のような白い男がそっと触れた。

「貴様の死は確かに惜しいが・・・その力で、その心で、その魂で・・・俗物であったことも惜しい。恨むらくは貴様が我が同胞として生まれなかった運命か」

白い男は、岩の聖櫃から手を放し、言った。

「あ奴の息子はともかく、俗物の人間がどうしてこの聖域にいる？」

「・・・ありゃー気づかれたー」

「お師匠、白々しい真似はおよろしく下さい。はげますよ」

「なんでっ!？」

洞窟の入り口にいる深い藍色のローブを着た黒髪の男はそう叫んだ。

その男と同色のローブを着た真紅の髪の少女は、それを無視し、白い男に質問を投げかける。

「貴方は誰ですか？」

「俗物に言う必要があるか？」

「ええ。俗物は俗物以外のことは解らないのですから。貴方がどれだけ優れた存在であろうと、私達に解るわけがありませんし、貴方が説明しない限り、私達に解らない程度に俗物ではない存在としか認識できませんね」

挑発するようにその少女は微笑む。

白い男はその少女をどう思ったのか、口元を嚙猛に吊り上げた。

「ほう、俗物にしては度胸がある。それに免じ、名だけを教えよう。

———我が名は、修羅」

修羅、その響きに黒髪の男は身構えた。

「修羅、ねえ……。こりやまた大層な大物だなあつたくよ。おい、弟子」

「……修羅？」

真紅の少女と黒い男に挟まれた黒い少年がそう尋ねる。

「夜叉は……。知らなかったのか？」

「うん」

「修羅っつーのはな——」

「————最強の存在だ」

白い男は黒い男の台詞を遮り、続ける。

「あ奴の息子だな？」

「・・・ああ」

「フン、あ奴も洒落た名前をつけるものだ」

夜叉とは神代に存在した鬼神の呼び名の一つである。また、白い男の名前、修羅もその鬼神の呼び名の一つだ。

「どのような願掛けがされているのかは、もはや解らんが・・・それもまた一興か。とことんあ奴は俺を面白がらせてくれる」

「・・・母、を・・・知って、る・・・？」

「ああ。我が同族の名を持つ者よ、俺は貴様の母を知っている」

一息。白い男は黒い男と真紅の少女に眼を向ける。

「貴様には是非、あ奴がどれほど優れた存在だったことを語ってやりたい————ところだが、俗物二人の耳に入るのは氣にくわん。故に————」

白い男は右腕を天にむけ、何かを握る仕草をする。

「十秒待て。話はそれからだ。——喜べよ、俗物。俺の手にかかって死ぬのだ」

白い男は、呟いた。

其は死に満ちる角環劇場
「コロッセオ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9683q/>

夜叉

2011年12月19日18時49分発行